

不都合と不愉快：日本の慰安婦問題のパラダイム転換

マーシャル・ワーズワース

クリエイティブスペース・インディペンデント出版

書評 タダシ・ハマ

「それなら私たちもまた兵士だった」

Pae Chok-kan (ペ・チョクカン) 韓国人慰安婦

韓国のナショナリスト（民族派）、人権活動家、マスメディアは、戦時中の日本の売春制度を、「国家がスポンサーとなった性奴隷システム」であり、「体系的に組織された不法（非合法？）かつ不道德な軍事活動」の一環だったと主張する。日本軍の売春制度というものは、今では、多数の証拠書類によって、告発されているようなものではなかったということが明らかになっている。戦時中の米軍が記録し、戦後は捕虜の尋問や押収した日本側の書類などが出てきているのである。その史料の多くが公表されてから相当な期間を経ているというのに、なお韓国の民族派およびそのシンパは、鼻で笑って相手にせず、もしくはことさらに見て見ぬ振りをしているのである。本書の著者マーシャル・ワーズワースは、第二次世界大戦中の日本軍の売春システムについて事実を究明し、彼なりに分析・解釈を加えている。本書は、日本軍の売春システムの真の性質、および戦時中の慰安婦の役割について、分析し解釈するための史料（資料）を豊富に提供している。

ワーズワースは韓国の民族派の話を「典型的な作り話」と呼んでいる。その作り話を実話と強弁するために、彼らはそれなりに証拠を提出しているが、その大半は慰安婦の証言である。それによると、彼女たちは、夜陰に紛れて日本軍兵士に拉致され、もしくは銃を突きつけられて、日本軍の性奴隷として働くことを強要されたということである。疑うことを知らない人が聞けば、こういう貧しい、今では年老いてしまった女性たちの物語は、間違いなく、「国家が本当にスポンサーになった性奴隷システム」という悪辣極まりない制度を日本が作り上げていた証拠だと考えてしまう。言うまでもないことだ。物を深く考える習慣のない人々がこういう与太話を聞いて、その気になってしまったのが、2007年の連邦下院決議121号だった。下院は、日本が戦時の「性奴隷」に関与したと言って、糾弾したのである。ところが、下院に送られた証言は、何年も前に行われた証言と話が食い違っていた。韓国の民族派は襤褸（ぼろ）を出してしまったことになる。

考えてみれば、日本人慰安婦も存在していたのだから、下院で証言させられたのが韓国人ばかりだったというのは腑に落ちない話だ。活動家たちの目的が、「組織的に編成された不法かつ不道德な」軍事行動を告発することであるのなら、日本人慰安婦の証言を求めるべきではなかったろうか。何と云っても、そのよう

な悪事が本当に行われていたのだったら、彼女たちこそが、自分たちの政府に迫害された真の犠牲者と言うべき存在だったはずなのだから。陰謀が見え隠れする。目的は外（ほか）にあった。活動家にとっては、慰安所も慰安婦の制度もどうでもいいことだったのだ。

ワーズワースはさらに進んで、活動家たちが彼らの「典型的な作り話」を補強するために重要な「証拠」を捏造した事実を暴（あば）き出す。吉田清治が、著書「私の戦争犯罪—朝鮮人強制連行（1983年）」の中で告白している所によると、戦時中、済州島で、数百人あるいは数千人に及ぶ韓国人女性を「強制連行」したとのことである。日本人が自ら告白した著書が存在するのだ。韓国人活動家にとっては、棚から牡丹餅が落ちて来たような話だが、実はとんでもない話なのだ。ワーズワースは、吉田の嘘はすでに白日の下にさらされたという事実を指摘する。それも、日本のメディアでなく、韓国のメディアが1989年に報道したのである。その報道があったにも関わらず、吉田の著書は、「典型的な作り話」を補強するために使われ続けた。本書の中では直接言及されていないことであるが、連邦下院ともあろうものが、なぜこういう事実を受け入れて修正をしないのであろうか。不都合かつ不愉快な事実であることは理解するが。この2007年の下院決議がどんな事情の下で行われたかは知らない。しかし、このエピソードは下院の名誉にかかわる重大な問題ではなかろうか。下院は果たして、感情に動かされずに、事実に基づいて冷静に判断し、政策決定をする能力を持っているのだろうか。

日本軍の慰安婦に関する典型的な作り話の中で、一番重要なポイントは、誘拐もしくは強制連行があったかどうかという問題である。本書は、日本軍当局は、女性たちの誘拐を許可したこともなければ、もちろん自らそれに手を染めたことはなかった。——日本軍は、いかがわしい民間業者が、甘言を弄して女性たちに慰安婦として働かせることがないように警告を発していた。それにもかかわらず、韓国の民族派や人権活動家などの中には、慰安婦を「抑圧の犠牲者」に祀り上げ、現代の「性奴隷」と同一視する者がいる。韓国の民族派や人権活動家のこのような「性奴隷」説は、自らに跳ね返ってくる危険を孕んでいる。たとえば、オーストラリアでは、売春は合法である。この地に在住する韓国人たちは、韓国人売春婦の数の多さに懸念を示している。¹ 2012年には、オーストラリアの全売春婦のうちの約17%が韓国人だったと推定された。韓国政府の報告によると、韓国人女性で日本で売春をしていたのは50,000人、米国でしていたのは30,000人だったとのこと。こういう事実から浮かび上がる疑問は、果た

¹ 1面白い笑い話がある。売春婦は韓国の重要な輸出品だという話だ。「韓国人売春婦をオーストラリアから追い出そうというキャンペーンが始まっている」（Korea Times〈韓国日報系英語新聞〉2012年8月30日）

http://www.koreatimes.co.kr/www/news/nation/2012/08/117_118664.html; 「韓国の売春婦はニュージーランドを目指す」（2015年12月29日）

https://www.nzherald.co.nz/nz/news/article.cfm?c_id=1&objectid=11566927

して韓国人売春婦の全員が誘拐され、「性奴隷」になることを強いられていたのかということである。むしろ、女性たちのうちの相当部分が、自ら売春をすることを選択したと考える方が合理的であろう。他の国々の売春状況を見てみると、売春婦の大半は外国人であり、仕事の流れの中で、売春をするかどうかを選択できるようになっている。² しかし、強制があったという可能性を完全に排斥することはできない。特に、女性の権利と正義を声高に擁護する人々はそう言い募る。³ 日本人慰安婦もまた性奴隷だったという意見には今ではもう耳を藉す人は少ない。従って、本当に人権に関心を寄せる人々は、そんな細かい点に拘泥するよりは、誘拐と強制売春の問題に直接に立ち向かうべきであろう。

本書が指摘するように、日本にとっては、大戦末期に、兵士たちが自暴自棄になって犯罪的行為に走ったということは、まことに不都合かつ不愉快なことであろう——少数者の行動が日本の名誉を汚すことになったのである。ワーズワースが指摘していることであるが、日本の慰安所の制度は「軍人の性を規制し、戦場での性犯罪を抑止すること」が目的だった。日本軍兵士には、フィリピンの共産党ゲリラだと自白した女性一人を自分たちで勝手にレイプしたという疑惑がかかっている。

オランダ領東インド（蘭印／インドネシア）で起こったスマラン事件（スマラン慰安所事件）を見てみよう。スマランとは都市名。ジャワ州州都である。現地の日本軍将校が24人のヨーロッパ人、インドネシア人の女性捕虜を選び出して、強制的に「売春に従事」させたという事件である。⁴ 事件が起こる前に、将校たちは、軍の慰安所を設置しようという現地の部隊のガイドラインに従うように勧告を受けていた。この強制売春は約二箇月後に、第十六軍司令部によって停止させられた。関与した将校たちは戦後投獄され、うち一人は処刑された。こういう事件は、日本軍の慰安所制度の枠外で起こったことだとワーズワースは読者に訴えている。フィリピンでも、インドネシアでも、軍の慰安所というものは存在してはいた。しかし、その商行為および保険関係の措置に関しては、すべて、細部に至るまで軍の規則に従っていた。女性の募集は民間業者が行い、きちんと給料を支払っていた。

日本人将兵が犯した犯罪行為に関しては、日本が責任を負うのは当然であろう。しかし、代々の日本政府は、「慰安婦として苦しんだ」全ての女性に対し

² 「性的人身売買とは無縁の自由意志による慰安所での売春」 *The Conversation*, December 20, 2013. <http://theconversation.com/choice-on-offer-in-brothels-not-consistent-with-sex-trafficking-21623>.

³ 「『中国で性奴隷にされた北朝鮮の女性たち』」 BBC ニュース 2019年5月20日の報道 <https://www.bbc.com/news/world-asia-48340210>. “国連の性的虐待の恥,” *Unherd*, Feb. 14, 2019. <https://unherd.com/2019/02/the-uns-sexual-abuse-shame/>

⁴ 本書で触れられていないことは、別に10人の女性が慰安婦として働かされたという事実である。しかし、この10人は強制されたのではなく、自ら志願したように思われる。売春婦の中には囚人として拘禁されていた者も含まれていた。秦郁彦(2018)「慰安婦と戦場の性」(ハミルトンブックス)

て、「心からのお詫びと自責の念を伝える」という十把一からげの声明を発し続けて来た。こんなことを言って何になるというのか。韓国の民族派は、「慰安婦」とは、給料を支払われていた売春婦ばかりでなく、個別的な犯罪行為の被害者をも含むと主張して来た。さらに、日本が繰り返し繰り返し謝罪して来たことが問題だ。そんなことをするから、韓国の民族派は、日本側が「不法かつ不道徳」な「国がスポンサーになった性奴隷制度」を運営していたことを認めたと言って、鬼の首を取ったようにはしゃぎ立てる。ワーズワースの提案は、「慰安婦という荒唐無稽なイチャモンを相手にするな」ということである。具体例を挙げれば、「韓国が以前の両国間の合意を尊重せず、日本に敵意を抱き続ける限りは、日本は韓国に卑屈な態度を取ってはいけない」ということである。

ワーズワースは、慰安婦は性的なサービス以外にも貢献したことがあった、と指摘する。会話と思いやりでもって、郷愁に駆られている軍人たちを慰め、戦場で受けた精神的な傷を癒してやったことである。慰安婦たちは、空いた時間には軍人たちと一緒に社会活動を行っていた。慰安婦とその客になった日本軍将兵とが婚約したり、実際に結婚したりした例をワーズワースは列挙する。彼らの間には、無数の人間ドラマが繰り広げられていたのだ。本書はまた、慰安婦の悲しい思い出を描き出している。もう前線から戻って来ることのない愛する男との最後の別れである。また逆に、日本軍の元兵士たちの回想も悲しい。慰安婦との交際のことを思い出すと、「郷愁」と「ある種の愛」を感じると彼らは言う。ワーズワースは「軍人たちは肉体的精神的な慰めを求めている。女たちはそれに答えた。その果たした役目は偉大なものだった。それなのに、みんな忘却の彼方に消えてしまった」と嘆く。ワーズワースはさらに進んで、慰安婦は単なる売春婦という存在ではなかったと弁明する。ある韓国人慰安婦は「私たちは兵隊さんたちが戦うのを後ろから支えたのです」と証言する。慰安婦もまた兵士だったのだ。